

本田宮田遺跡発掘調査報告

—熊野農免農道造成工事に伴う発掘調査報告—

1998年3月

大門町教育委員会

序

大門町をはじめとする射水郡には、各時代にわたる遺跡が数多く散在します。我々はそのかけがえない文化遺産を保護、活用し、後世に守り伝えることは、現在に生きるものの使命として深く認識し、日々力を注いでいるところであります。

しかし、近年では産業経済の振興の発展のため、各種の開発事業が次々に実施されているなかで、貴重な文化遺産が徐々に消滅していかうとしております。

この報告書は、町の農道造成事業に伴って、その一部が消滅せざるを得なかった祖先の残した文化遺産を、記録保存し、子孫へ伝えていくことが我々の果たせるせめてもの責務であると考えて調査を実施し、その成果をまとめたものであります。

この報告書が多くの人々に活用され、地域の歴史の理解と文化財の保護意識の高揚になれば幸いです。

調査の終了に際し、適切な指導助言を賜りました県埋蔵文化財センターの各位及び調査にご理解、ご協力をいただきました地元関係各位には厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

大門町教育委員会
教育長 野上 和雄

例 言

- 1 本書は、富山県村水郡大門町に所在する本田宮田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、団体営農免農道整備事業（熊野地区）に伴う本調査である。
- 3 調査期間は1997年5月28日～12月12日（実働84日）、調査面積は2,500㎡である。
- 4 調査は大門町教育委員会が実施した。
- 5 調査、及び本書の編集・執筆は大門町教育委員会 主事 尾野寺克実が担当した。
- 6 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する。
安念幹雄・上野章・宇野隆夫・高梨清志・宮田明・宮田進一（敬省略・五十音順）
- 7 発掘調査の作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 8 遺物整理・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。
中谷正和・浅野良治・春名理史・三浦英俊・戸田真美子・船谷朋子・滝沢匡・廣瀬直樹・高橋泰雄・貫井美鈴・山口政志・五十嵐静代
- 9 挿图中的方位は磁北を指す。
- 10 凡 例

地山

目 次

挿図目次

序	第1図 遺跡の位置と環境	1	1
例言	第2図 調査区割付図	2	2
目次	第3図 基本層序模式図	2	2
I 序章	第4図 第1地区平面図・遺構断面図	5	5
1 遺跡の位置と環境	第5図 第2地区平面図・遺構断面図	6	6
2 調査に至る経緯	第6図 第3地区平面図・遺構断面図	7	7
II 調査の概要	第7図 第4地区平面図・遺構断面図	9	9
1 調査の経過	第8図 出土土器実測図（1）	11	11
2 層位	第9図 出土土器実測図（2）	12	12
3 遺構	第10図 出土土器実測図（3）	13	13
4 遺物	第11図 その他の遺物	14	14
(1) 土器			
(2) その他			
III まとめ			
参考文献			
写真図版			

I 序 章

1 遺跡の位置と環境（第1図）

大門町は、県の中央北部、射水平野の南西端に位置し、東は小杉町、西・南は高岡市、北は大島町に接している。地形的には、庄川右岸の扇状地と、丘陵地からなり、和田川が貫流している。

今回、発掘調査を行った本田宮田遺跡が位置する射水平野は、沖積平野であり、遺跡の集中地となっている。

その中で、当遺跡は庄川右岸の扇状地に位置し、標高8.6m～7.4mで南から北へ向け徐々に低くなる。

また、遺跡内を東西に神楽川が貫流しており、古代・中世には船着き場として栄え、新潟市放生津との交流もあったとされる。

2 調査に至る経緯

大門町では、団体営農免農道整備事業熊野地区を計画、平成元年度より着工した。事業は農道の一部拡幅改良、一部新設で、幅員7mにするものである。

当路線計画地区の一部は、富山県農林水産部高岡農地林務事務所が平成4年度より平成10年度まで行った、大門東部地区景観は場整備事業の対象地に含まれていた。町教育委員会では、は場整備事業に先立ち、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て試掘調査を平成4年度から平成8年度の5ヶ年で実施し、確認した埋蔵文化財包蔵地は、遺構面、及び遺物包含層を傷つけないように計画変更を高岡農地林務事務所に求め、その理解を得て保護してきた。

しかし、農道新設部分に、その試掘調査時に確認した埋蔵文化財包蔵地が存在するため、町教育委員会は、可産業課とその取り扱いについて協議し、工事に先立ち、本調査を実施することとなった。



第1図 遺跡の位置と環境

1. 二口浦免
2. 二口五反田
3. 本江畑田Ⅰ
4. 本江大坪Ⅰ
5. 棚田
6. 本江畑田Ⅱ
7. 本江大坪Ⅱ
8. 本江宮田
9. 二口
10. 安吉
11. 安吉Ⅱ
12. 本田天水
13. 本田杉田
14. 本田畑田
15. 本田宮田

II 調査の概要

1 調査の経過 (第2図)

任意で調査対象地全体にわたる10×10mの南北グリッドでX 0～260, Y 0～40まで設定した。

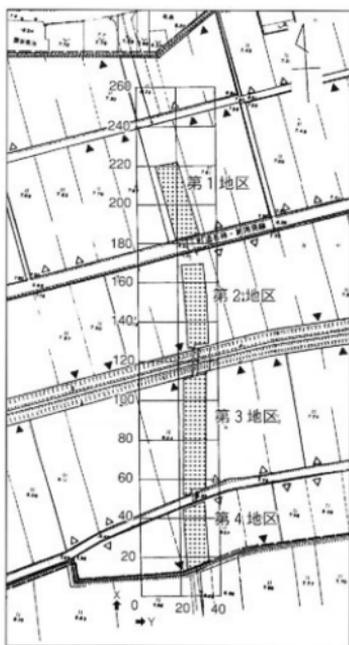
調査対象地は町道若林・新開発線, 神楽川, 及び農道で4分割されているため, 北から順に第1地区～第4地区とした。調査面積は2,500m²である。5月28日, 重機による表土掘削開始。X 218.2, Y 102.0～X 220.6, Y 20.5以北は攪乱が激しく, 遺構検出が不可能と判断し, 調査対象から外す。6月2日より作業員参入。4地区から順に遺構検出, 及び遺構掘削を行う。地区毎に遺構半載, 遺構断面図作成, 遺構完掘, 平面図作成を行う。遺物は, 随時取り上げ, 整理箱にして4箱出土している。調査期間は5月28～12月12日(実働84日)である。

2 層位 (第3図)

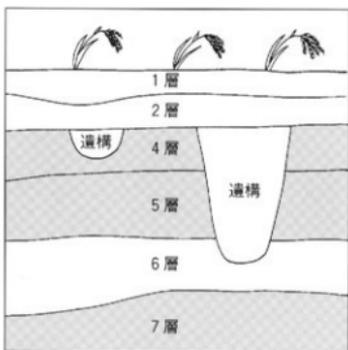
今回調査区の基本的な層序は, 表層から, 1層暗褐色土, 2層灰褐色土, 3層黒褐色土, 4層黄灰色・青灰色土, 5層白灰色土, 6層暗灰色土, 7層灰色土となる。

1層暗褐色土は水田耕作土である。若干の粘性を持つ。層厚15～30cm。2層灰褐色土は水田床土で, しまり・粘性が強い。層厚10～30cm。3層黒褐色土は粘性が強く, 赤生土器を包含する。3地区の谷部へ向かう落ち込みで確認できたが, その他の場所では, 削平のため消失しており, 確認できない。4層黄灰色・青灰色土は粘性の強い地山層である。空気に触れると酸化して黄味が強い黄灰色になり, 検出面が低く水没した時など空気に触れない場合は還元して青灰色になる。鉄分・有機物が多く混じり, 攪乱が多く入る。今回検出できた遺構は全てこの層上面で検出している。層厚30～40cm。5層白灰色土は粘性が非常に強く, 水分が少ない地山層で, 紙粘土を想像させる土質である。層厚50～60cm。6層暗灰色土は, 粘性があり, 水分が若干少ない有機質な土層で, 層厚は40～60cm。7層灰色土は砂層で, 湧水点である。

調査区はは場整備による区画整理された水田で, 全体に削平を受けている。そのため, 本来の古代・中世の遺構検出面は消失し, その遺構は深いものについてのみ, 3層で弥生・古墳時代の遺構と共に確認できた。また, 基本的に3層上面で削平が止まるが, 第2・第3地区では3層をも深く削った状態であった。



第2図 調査区劃分図



第3図 基本層序模式図

3 遺構

前述のとおり、4地区に分けて調査を行っている。全体に、旧のは場整備等によって削平を受けており、現状での遺構深度は浅いものが多い。

以下、地区ごとに分けて概要を記す。

第1地区（第4図）

第1地区は、前述の擾乱部を含めて、X180.5～240.0、Y0～31.1の間に設定した。

検出できた遺構には、掘立柱建物1棟、溝5条、穴30基がある。掘立柱建物の柱穴以外の穴は、出土遺物はなく性格・年代ともに不明である。

SB1 X193～198、Y25以東で検出した掘立柱建物である。1間×2間まで確認できたが、調査区東端に存するため、正確な規模は不明である。検出した柱穴は全て円形を呈し、幅6～27cm、最深9～15cmを測る。覆土は全て粘質をもつ黒褐色土が入る。出土遺物はなく、年代は不明である。

SD1 X211～214、Y11～17の間で検出した溝である。幅70cm前後、最深で29cmを測る。覆土は単層で、粘質をもち、地山ブロックが混入する黒色土が入り、人為的に埋められたことを示す。出土遺物はなく、年代は不明である。

SD2 X191～195、Y18～28の間で検出した溝である。幅45cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で、粘質をもつ黒褐色土が入る。出土遺物はなく、年代は不明である。

SD3 X187～189、Y26～30の間で検出した溝である。幅80cm前後、最深で5cmを測る。覆土は単層で、粘質をもつ黒褐色土が入る。出土遺物はなく、年代は不明である。

SD4 X184～192の間で検出した溝である。東から西北へ向けて流れ、Y25付近で2条に分岐して平行に流れる。幅は分岐前最大で220cm、最小で50cm、分岐後で80～120cmを測る。深度は最深部で54cmを測る。覆土は地山ブロックや炭化物の混じる土層で形成されており、人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物から年代は中世と考えられる。

SD5 X184～187、Y18～24の間で検出した溝である。幅120cm前後、最深で7cmを測る。削平のため、Y24付近で確認できなくなる。覆土は単層で、粘質をもつ黒褐色土が入る。出土遺物はなく、年代は不明である。

また、第1サブトレンチをX195.7、Y17.0～X216.9、Y11.8のラインを西壁に、第2サブトレンチをX215.3、Y13.2～X217.5、Y21.3のラインを北壁に、第3サブトレンチをX204.6、Y15.9～X216.2、Y20.8のラインを北壁に、第4サブトレンチをX205.0、Y23.2～X216.1、Y20.2のラインを北壁に幅約1mで設定し、遺構検出時にプランで認められた流路の時期、深度、及び下層の確認を行なった。流路の覆土は人為的な盛土で、上部は点検された土層であった。深度は110cm～140cmを測る。出土遺物はなく、少量の自然木と鼠の頭骸骨を確認したのみである。旧のは場整備時に埋められた近現代に存在した用排水的な川と考えられる。下層については遺構・遺物を確認することはできなかった。

第2地区（第5図）

第2地区は、X122.6～164.1、Y21.9～36.1の間に設定した。

検出できた遺構には、溝2条、土坑2基、穴35基がある。

この地区が最も深く削平を受けており、遺構検出面が30～50cm下がっていると考えられる。そのため、遺構の本来

の規模は幅、深さともに現状よりもかなり大きくなると思われる。

SD 6 X162～164, Y22～25の間で検出した溝である。幅50cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で、粘質をもつ暗灰褐色土が入る。出土遺物はなく、年代は不明である。

SD 7 X153～156の間で検出した川である。幅170cm前後、最深で33cmを測る。覆土は上部、下部ともに灰褐色系の粘質土で、下部は若干シルト質で炭を含み、自然堆積の状況を示唆する。出土遺物から年代は弥生時代と考えられる。

SK 1 X152～154, Y19～21の間で検出した土坑である。最大径100cmを測り、不整形を呈す。削平のため現状の最大深度は2cmを測るにすぎない。この遺構は廃棄土坑と思われ、土器片が多量に地山直上から出土したため検出できたもので、覆土は遺存していなかった。出土遺物から年代は奈良・平安時代と考えられる。

SK 2 X146～158, Y25～27の間で検出した土坑である。トレンチ外に一部かかっているが、最大径597cmを測り、隅隅長方形を呈すものと考えられる。最大深度は13cmを測る。覆土は単層で、粘質をもち、炭が混入する黒褐色土が入る。出土遺物から年代は弥生時代中期後葉と考えられる。

SK 3 X143～144, Y16～17の間で検出した穴である。最大径95cmを測り、円形を呈すものと考えられる。最大深度は23cmを測る。覆土は単層で、粘質をもち、炭が混入する黒褐色土が入る。出土遺物には図示・復元できるものはなかったが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。

SP 5 X138, Y22が中心となる位置で検出した穴である。最大径35cmを測り、円形を呈する。最大深度は8cmを測る。この遺構は廃棄穴と思われ、土器片が地山直上から出土したため検出できたもので、覆土の特徴を確認できなかった。出土遺物から年代は弥生時代後期と考えられる。

第3地区 (第6図)

第3地区は、X49.2～113.6, Y22.6～34.9の間に設定した。

検出された遺構には、溝5条、穴1基がある。また、神楽川に向けて谷地形状に地山が落ち込んでいく範囲も確認した。

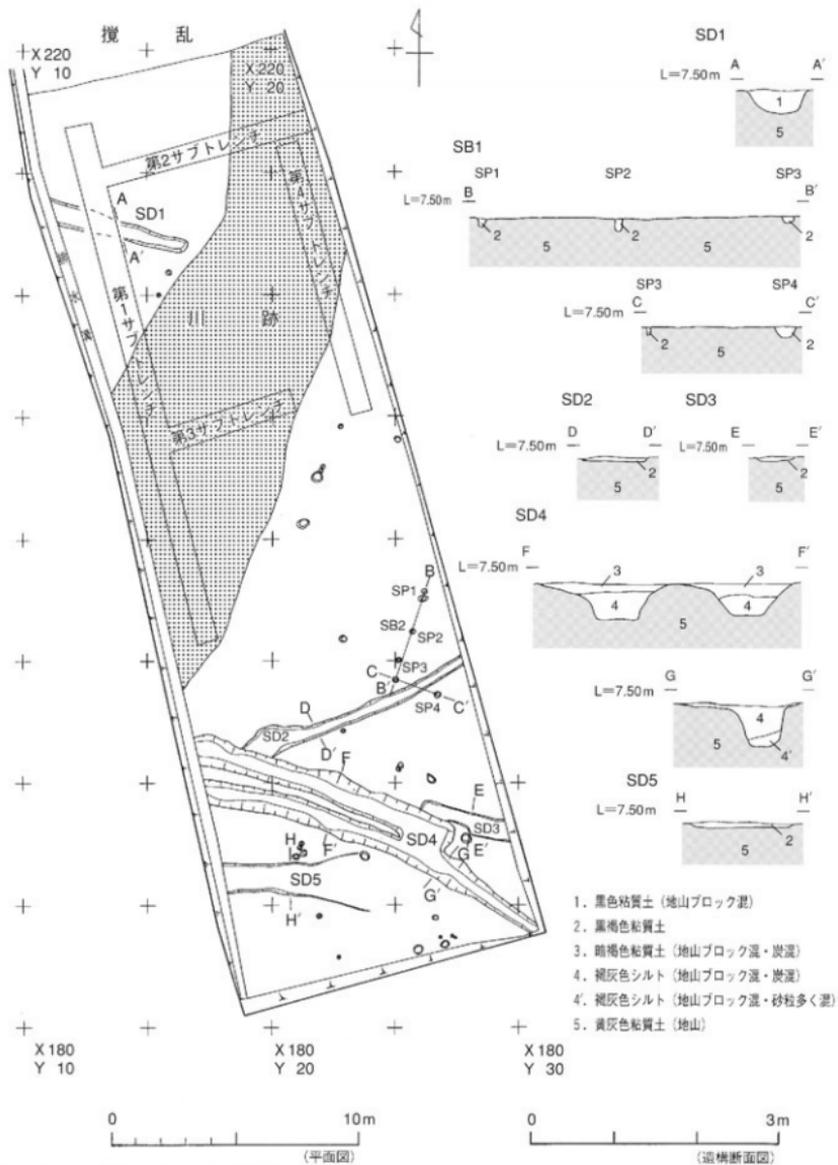
SD 8 X77～78, Y29以東で検出した溝である。幅30cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で、シルト質の灰黒色土が入る。出土遺物には図示・復元できるものはなかったが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。

SD 9 X72～75, Y25以東で検出した溝である。幅60cm前後、最深で6cmを測る。覆土は単層で、シルト質の灰黒色土が入る。出土遺物には図示・復元できるものはなかったが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。

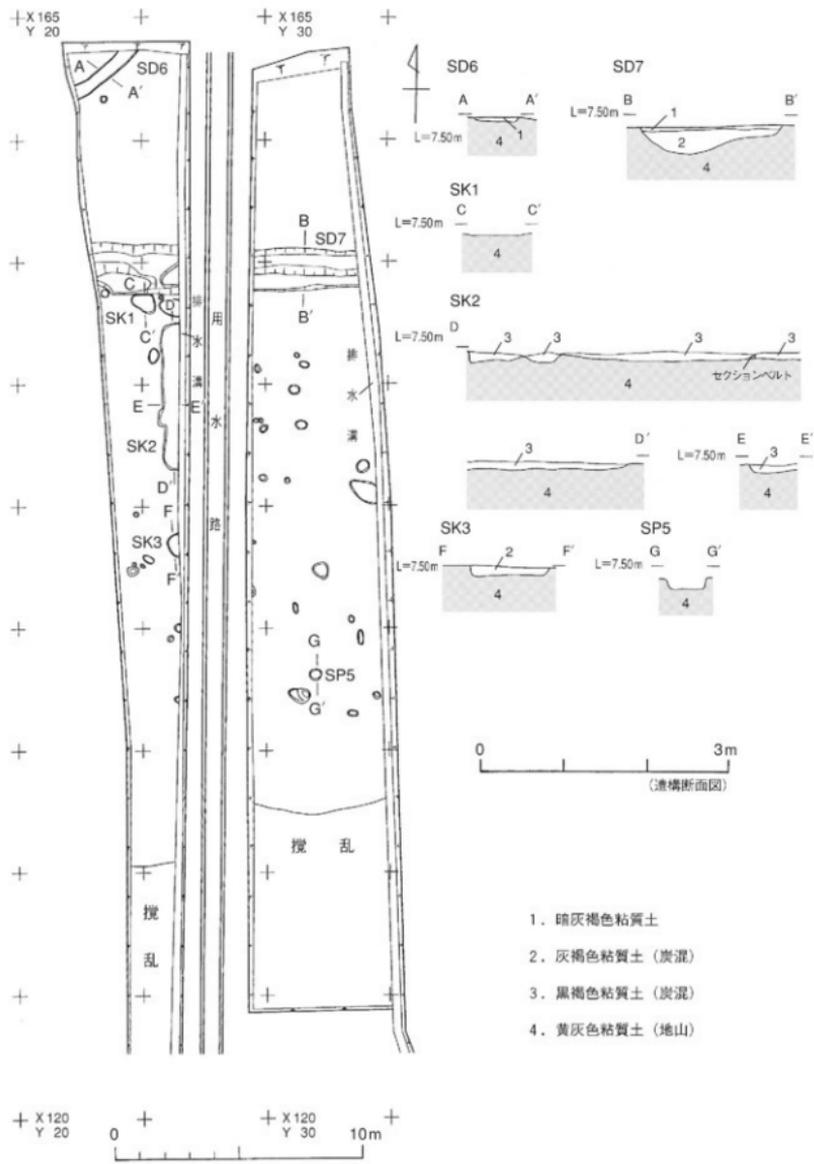
SD 10 X66～72, Y23～25の間で検出した溝である。幅50cm前後、最深で17cmを測る。覆土は単層で、シルト質の灰黒色土が入る。出土遺物には図示・復元できるものはなかったが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。

SD 11 X59～65の間で検出した溝である。幅80cm前後、最深で20cmを測る。覆土は上部、下部ともに黒色系の粘質土で、下部はシルト質を含む。出土遺物はなく、年代は不明である。

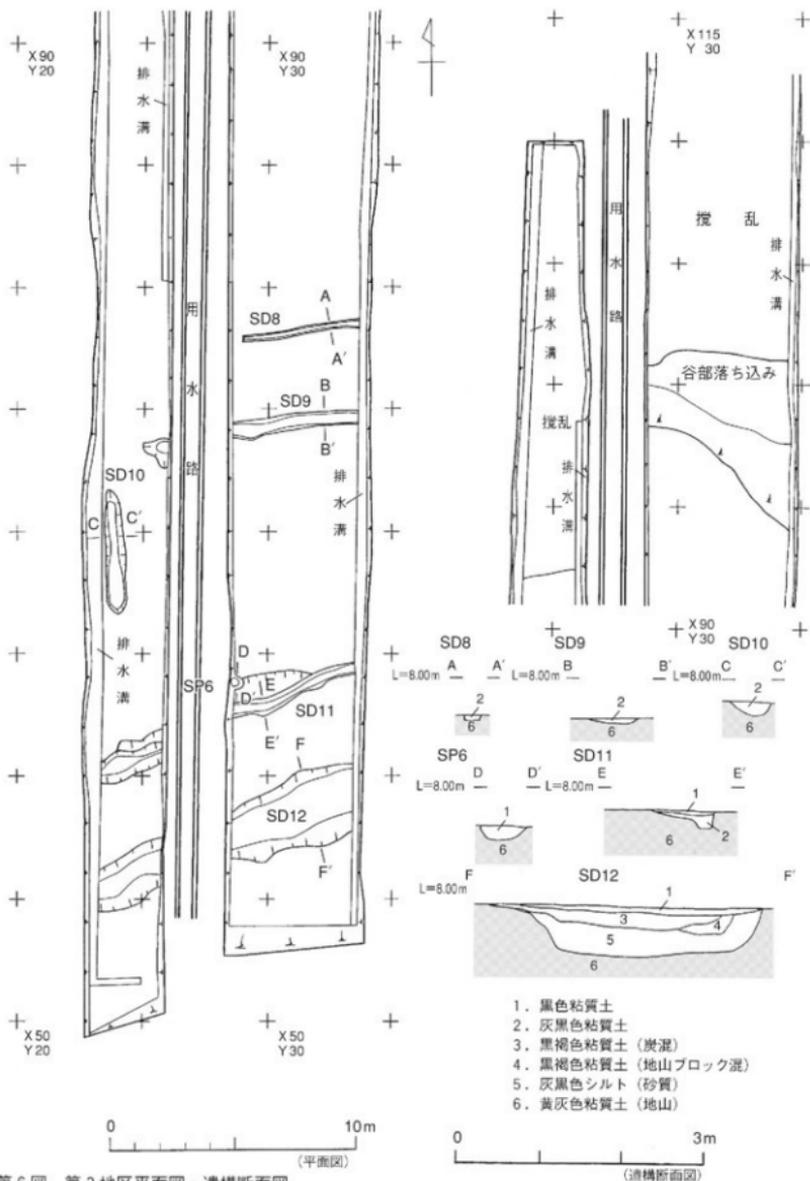
SD 12 X54～61の間で検出した川である。幅330cm前後、最深で60cmを測る。覆土は黒色系の粘質土であり、下部は砂質を含むシルト層が入り、ある時期まで自然堆積していたことを窺わせる。その後は地山ブロックが混じる層が入るなど、人の手が加わったことを示唆する。出土遺物から存続年代は弥生時代中期後葉～古墳時代前期の間と考えられる。また、古墳時代の土器が多く入る上部より、木製の板材が出土している。



第4図 第1地区平面図・遺構断面図



第5図 第2地区平面図・遺構断面図 (平面図)



SP6 X64, Y29が中心となる位置で検出した穴である。調査区外埠に接するため、外形は確認できなかったが、おそらく円形を呈していたと思われる。最大径57cm、最深で18cmを測る。覆土は単層で、粘質をもつ黒色土が入る。出土遺物から年代は弥生時代中期後葉～後期前半と考えられる。

谷部落ち込み 東側トレンチ北側、X94～102, Y28～30の間で検出した神楽川へ続く落ち込み口で、この地点のみ遺存していた。第2地区南側や第3地区の用水を挟んだトレンチでは確認できなかった。は場整備時に神楽川を改修した際に壊されているようである。覆土はシルト質を含む灰黒色粘質土が入る。ここで確認できたものについても、落ち際の斜面、高低差にして30cm前後のみの遺存であり、その下部は盛土によって切られている。現在の神楽川は、直線的に川幅も小さくなって、田圃の用排水となっているが、地元住民によると、以前は川幅も広く、蛇行しながら流れていた、とのことなので、その名残ではないかと考えられる。出土遺物から主体を成す年代は古墳時代前期と考えられる。

第4地区（第7図）

第4地区は、X13.0～48.0, Y22.5～34.4の間に設定した。

検出できた遺構には、溝3条、土坑2基、穴109基がある。

土坑・穴は出土遺物もなく、性格・時期ともに不明である。

SD13 X40～42, Y23～29の間で検出した溝である。幅45cm前後、最深で15cmを測る。覆土は単層で、粘質をもち、炭が混入する暗褐色土が入る。出土遺物には図示・復元できるものはなかったが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。

SD14 X24～26の間で検出した溝である。幅35cm前後、最深で4cmを測る。覆土は単層で、シルト質で炭が混入する黒色土が入る。出土遺物には図示・復元できるものはなかったが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。

SD15 X17～21の間で検出した溝である。幅130～145cm、最深で45cmを測る。覆土は上部、下部ともにシルト質の土層が入り、下部は砂質が強くなる。自然堆積の状況を示す。また、一部では下部の砂質層を切ってシルト質の土層が入り、人為的な力も若干加わっていることを窺わせる。出土遺物から年代は弥生時代と考えられる。

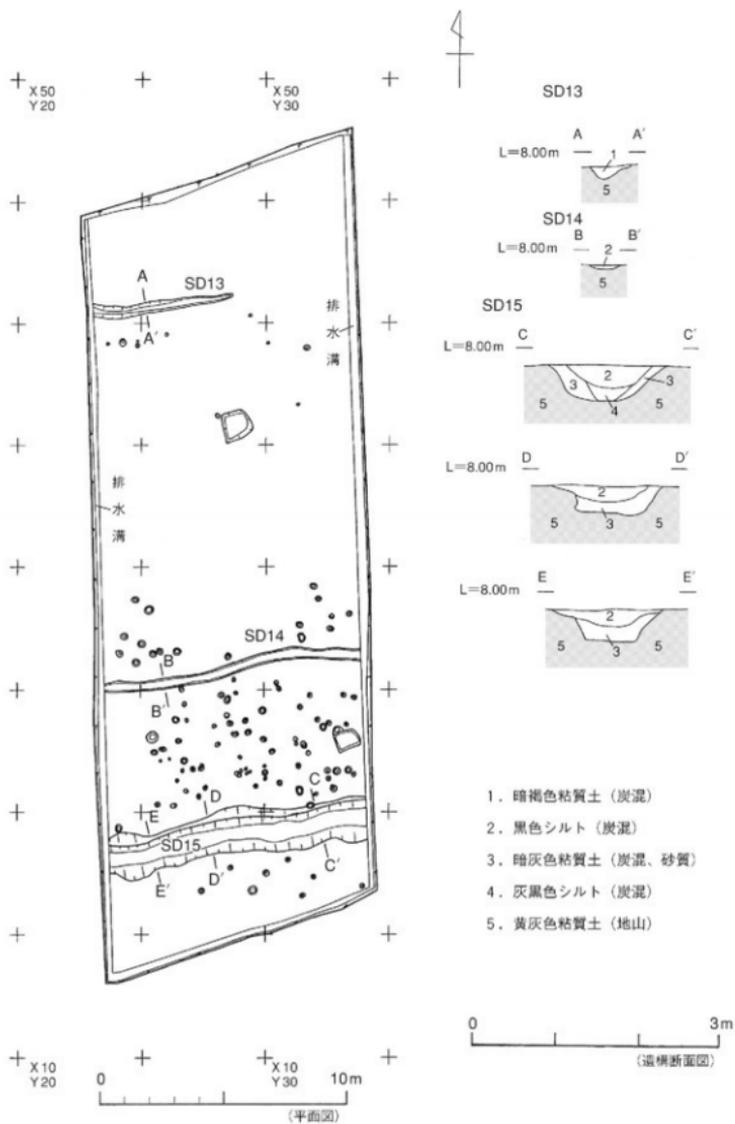
4 遺物

(1) 土器

弥生時代中期後葉～古墳時代前期が主で、奈良・平安時代、中世の土器も若干出土している。以下、遺構ごとに出土遺物の概略を紹介する。

第1地区

SD4（第8図）1～7は珠洲焼である。1・2はすり鉢で、口縁部外端をシャープに引き出す。3は竈、もしくは甕の底部である。4は竈（R種）である。底面に静止糸切痕を残す。5～7は壺、もしくは甕の体部である。5・6・7は外面にそれぞれ7条/3cm・10条/3cm・8条/3cmの平行叩きを施す。時期は珠洲Ⅲ～Ⅴ期の範囲に収まる。そのほか図示し得なかった遺物には年代・器種不明の土師質土器がある。



第7図 第4地区平面図・遺構断面図

第2地区

SD7 (第8図) 8~10は弥生土器の壺, もしくは甕の底部である。8は破砕後内面に2次被熱を受けている。10は外面に黒斑を認められる。

SK1 (第8図) 11は須恵器の壺の底部である。その他に図示し得なかったが、奈良・平安時代のもと考えられる土師質土器の壺が出土している。

SK2 (第8図) 12・13は弥生土器である。12は広口壺の口縁部である。13は長頸壺の頸部である。双方とも中期後葉まで溯る可能性がある。

SP5 (第8図) 14~16は弥生土器である。14は壺の口縁部で縁部を丸くおさめている。15・16は甕の底部で15は外面に斜位の, 16は内面に横位ハケ調整を施す。全体に後期前半に属する。

第3地区

SP6 (第8図) 17・18は弥生土器である。17は壺の肩部で、沈線文、刺突文、櫛齒状工具による刺突文を施す。時期は中期後葉で、長野県の栗林様式の系譜を引くものと考えられる。18は甕の底部である。外面に斜位ハケ調整を施す。年代は後期と考えられる。

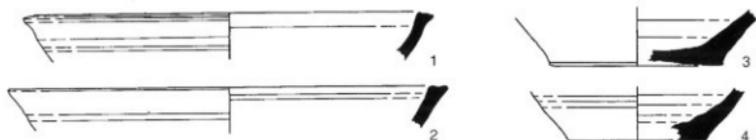
SD12 (第9図) 19~22は弥生土器, 23~32は土師質土器である。19は広口壺の口縁部である。口唇外面にキザミ, 内面に櫛齒状工具による羽状文を施す。年代は中期後葉に属する。20は有段口縁を持つ甕の口縁部である。時期は後期に属する。21は壺, もしくは甕の底部, 22は甕の底部である。年代は双方とも後期に属する。23~28は甕の口縁部である。24は口唇部が肥厚する特徴を持ち、布留式と考えられる。26は口辺部外面に横位ハケ調整, 頸部外面に縦位ハケ調整, 内面には工具によるナデ調整を施す。年代は後期に属する。27は口縁端部に指頭痕を残し, 頸部に工具によるナデ調整を施す。口縁部内外面に横位ハケ調整を施す。29は壺, もしくは甕の底部である。内面にハケ調整を施す。30は有孔鉢, もしくは器台である。内外面にミガキを施す。31は高杯の脚部である。外反脚で, 外面に縦方向にミガキを, 内面に板状工具によるナデ調整を施す。脚部に4方向穿孔している。東海の系譜を引くものと考えられる。年代は、弥生時代終末~古墳時代前期に属する。32は小型器台である。外面に横方向にナデ調整を, 内面にナデ調整を施す。脚部に3方向穿孔している。

谷部落ち込み (第9図) 33~43は土師質土器と思われる。33は甕の口縁部である。外面にハケ調整後ナデ調整を施す。34は壺の口縁部である。35・36は有段口縁壺の口縁部である。36は口縁部外面に断面三角形の貼付突起を持つ。年代は古墳時代前期と考えられる。37~40は甕の口縁部である。41は壺の口縁部である。頸部外面に縦位ハケ調整を施し, また内外面ともナデ調整を施す。42は高杯の杯部である。43は高杯, もしくは器台の脚部である。双方とも年代は古墳時代前期と考えられる。

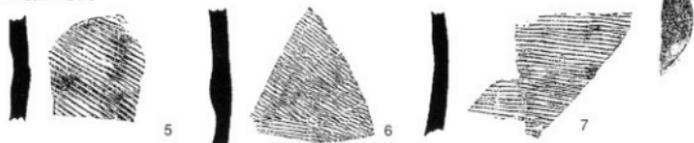
第4地区

SD15 (第9図) 44~48は弥生土器と考えられる。44・45は壺, もしくは甕の底部である。44は内面に指頭痕を持つ。45は外面に縦位ハケ調整を施す。46は甕の底部である。47・48は壺の体部である。47は内面に, 48は外面にハケ調整を施す。

第1地区 SD4



第2地区 SD6



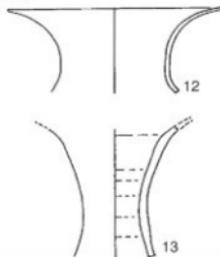
SD7



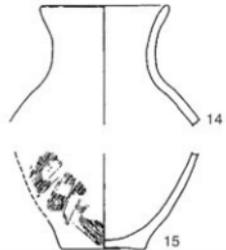
SK1



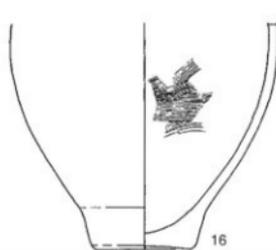
SK2



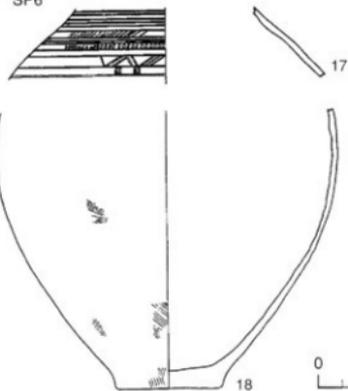
SP5



SK1

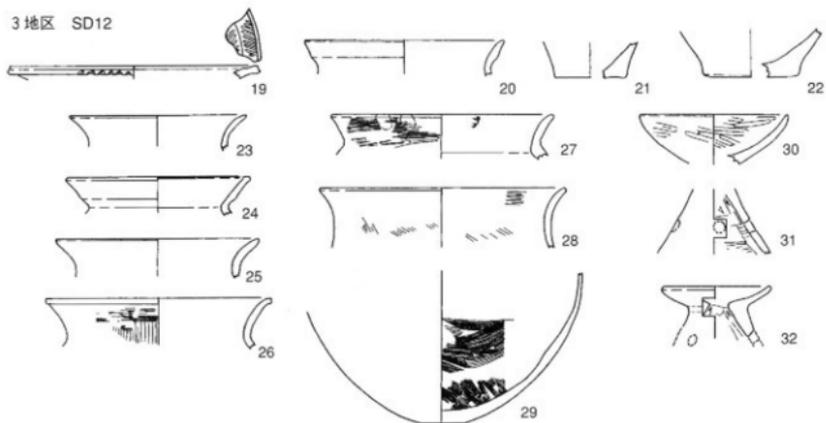


第3地区 SP6

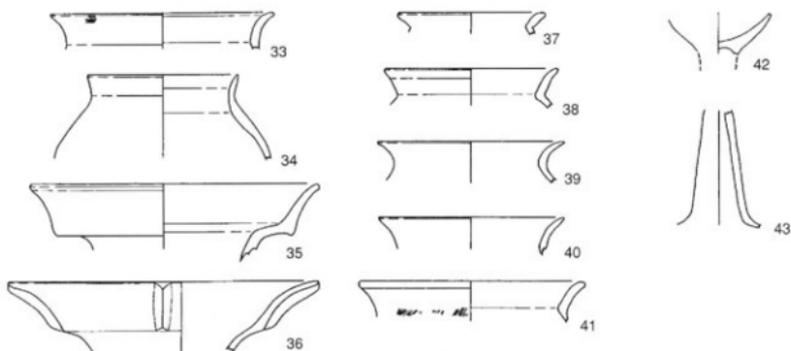


第8图 出土土器实测图(1)

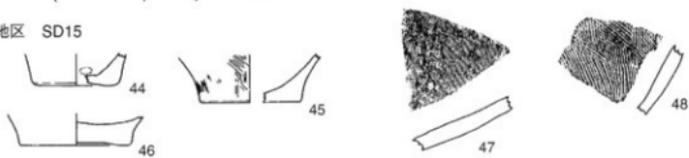
3地区 SD12



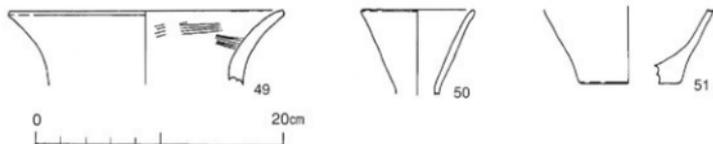
谷部落ち込み



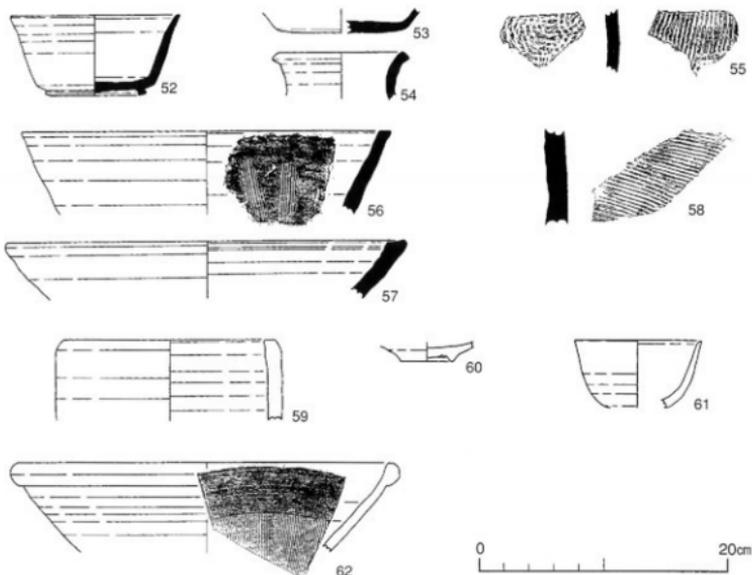
4地区 SD15



包含層 出土



第9図 出土土器実測図(2)



第10図 出土土器実測図(3)

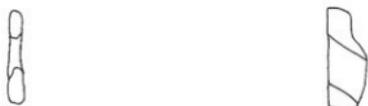
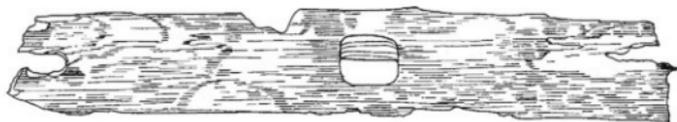
包含層出土土器(第9・10図) 2 層位の段で述べたとおり、本来の遺物包含層は遺存していない。ここでいう遺物包含層とは耕土・床土を指し、当然動いている土であるので、それをそのまま鶴呑みには出来ないが、既に削平され、現状で遺存していない遺構の年代や、当遺跡内の他の地点での年代を推定する際に幾許かの足掛かりになると考えたので、紹介しておく。

49～51は弥生土器である。49・50は長頸壺と思われる。49は内面に横位ハケ調整を施す。51は壺、もしくは甕の底部である。52～55は須恵器である。52は有台杯である。器形は体部でやや膨らみを持ちながら立上がり、口辺部で若干外反する。高台は断面長方形を呈する。53は無台杯の底部である。54は壺の口縁部である。55は甕の体部である。外面に8条/3cmの平行線叩きを施し、内面には同心円当てを具を当てる。56～58は珠洲焼である。56・57はすり鉢である。56の口縁端部はシャープで平直におさめ、体部は直線的に開く。内面には1.6cm幅に9条の原体を2単位確認できる。年代は珠洲Ⅲ期である。57は口縁基部をナア、肩部外側が肥厚する。口縁部内面に沈線を一条巡らす。年代は珠洲Ⅴ期である。58は壺、もしくは甕の体部である。外面に9条/3cmの平行叩きを施す。年代は珠洲Ⅴ期である。59は瓦器の火鉢である。60・61は越中瀬戸焼である。60は皿で、底面に削りだし高台を付す。61は椀である。外面の底部付近は露胎で、その他内外面には鉄釉を施す。62は近世陶器のすり鉢である。内外面にサビ釉を施す。

(2) その他(第11図)

土器以外に、第3地区のSD12から木製品、遺物包含層から古銭が出土している。

木製品 (SD12)



63



64



古銭 (包含層)



65



66



67



第11図 その他の遺物

63・64は木製品の板材である。63は残存部中最大長136.0cm, 最大幅23.5cm, 最大厚8.0cmを測る。両端, 及び裏面の一部が欠損している。中央部に12.0cm×10.0cmの方形の穴を約55°の角度をつけて穿っている。64は残存部中最大長138.5cm, 最大幅18.0cm, 最大厚3.0cmを測る。これも両端は欠損している。両端に正方形, 中央部付近下側に長方形の穴を左右対象を意識して垂直に穿っている。穴の大きさは左から順に, 7.5cm×8.5cm, 7.5cm×3.5cm, 8.5cm×4.0cm, 7.0cm×7.0cmを測る (全て長軸×短軸)。

65～67は古銭である。65は永樂通宝である。直径2.4cmを測る。66・67は寛永通宝である。66は直径2.4cmを測る。67は裏面に11波の波紋が入っている。直径2.8cmを測る。

Ⅲ ま と め

今回の調査では、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の集落の一端を確認できた。ここでは、各時代ごとに調査の成果を簡単に整理してまとめたい。

1 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺構は第1地区を除く全てのトレンチで確認している。主体は弥生時代後期であるが、中期後葉に溯るものや、古墳時代前期まで下るものも確認している。

弥生時代中期後葉の遺構はSK2・SP6である。残念ながら削平が激しく、遺構の全容を明らかにすることはできなかったが、SP6より出土した壺は長野県の粟林様式の影響を強く受け、当地との交流が行われていたことを示唆する。

弥生時代後期の遺構・遺物が最も多く確認できた。住居跡は確認できず、集落の端部であったと考えられる。その主体は以前に『大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告』で報告したように、今回調査区より西側になると考えられる。弥生時代終末～古墳時代前期に位置することが決定付けられる遺構は確認できなかったが、遺物では東海地方の流れを汲むもの(31)や、口縁帯外面に断面三角形の貼り付け突帯をもつ他に類例を見ないもの(36)が出土しており、興味が引かれる。

また、溝や谷部の落ち際では弥生時代後期～古墳時代前期までの遺物がまぎらまぎら出土しており、当地の集落は弥生時代中期後葉～古墳時代前期まで継続的に存続していたことを示す。

2 奈良・平安時代

遺構では第2地区のSK1のみの確認であるが、包含層より奈良時代後半～平安時代前期に位置づけられる遺物が出土しており、集落の存在を期待させる。こちらは、今回調査区より東側に集落の主体部をもつものと考えられる。

3 中・近世

SD4が中世の遺構と考えられる。珠洲Ⅲ～Ⅴ期の遺物が出土している。また、第1地区の他の遺構の層位にもSD4と同じ層土を見られたことから、13～15世紀に集落が存在したと考えられる。前段では時期不明としたSB1も当該時期に含まれる可能性が高い。

越中瀬口や、古銭が包含層より出土したことから近世の集落も存在したことを窺わせる。

今回調査区の問題も削平を受けて遺存状況は悪いと考えられるので、集落主体部の推定は現段階では難しい。

今回の調査は農道造成が原因であり、当然、線的な調査区の設定のため遺跡の全容は掘みきれなかった。面的に調査実施できれば、弥生時代中期～古墳時代前期のまとまった資料の発見が期待できる。他地域との交流関係を含めた内容の解明を今後の課題として、締めくりたい。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1995 「谷内・杉谷遺跡群」
- 金沢市教育委員会 1996 「西念・南新保遺跡Ⅳ」
- 大門町教育委員会 1997 「大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告」
- 田嶋明人 1988 「Ⅳ 考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 富山県教育委員会・大門町教育委員会 1991 「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（1）」
- 富山県教育委員会・大門町教育委員会 1992 「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（2）」
- 富山県教育委員会 1982 「北陸自動車道遺跡調査報告・上市町上器・石器編一」
- 富山県教育委員会 1984 「北陸自動車道遺跡調査報告・上市町木製品・総括編一」
- 谷内尾善司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川県考古学研究会
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 吉岡康暢 1991 「日本海域の上器・陶磁」六興出版



上：調査対象地全景

下：SD4全景

写真図版 1



上段左：SB 1

上段右：SP 6

中段左：SK 1

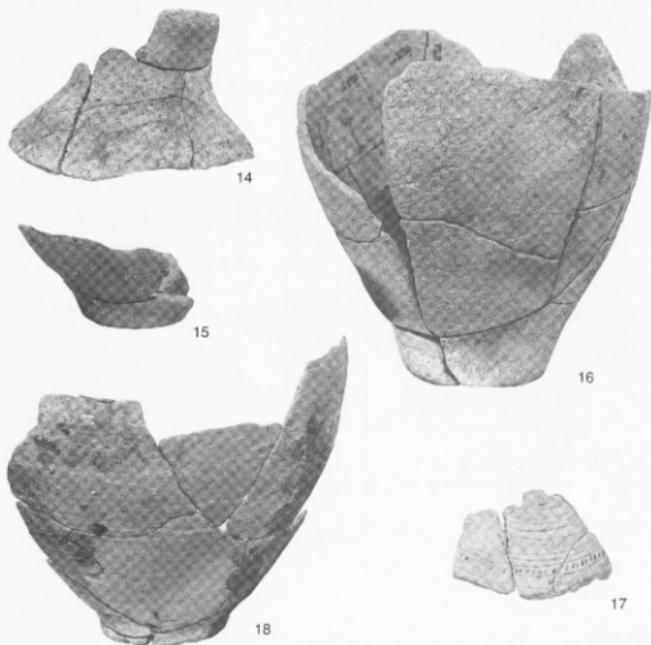
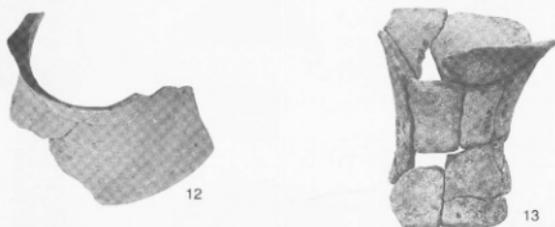
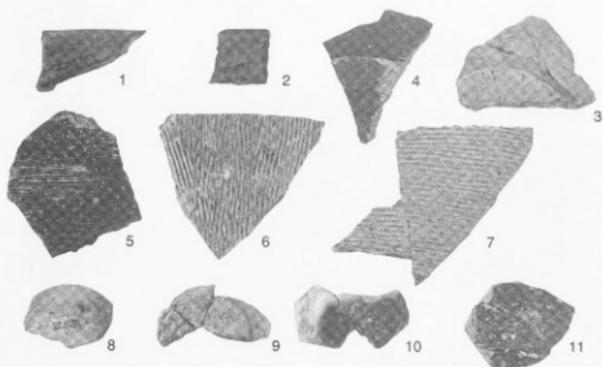
中段右：SK 2

下段左：SD 15

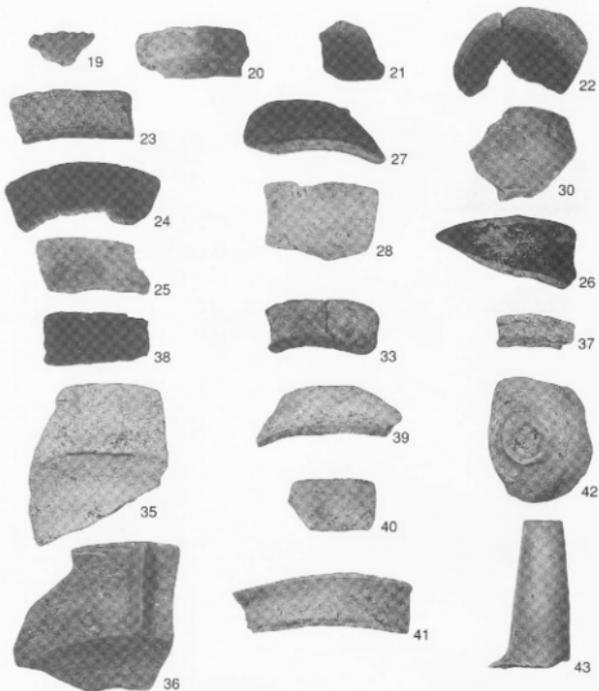
下段右：SD 12

写真図版 2

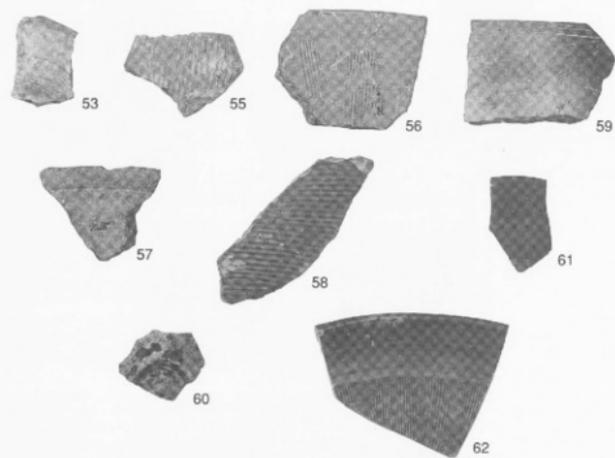
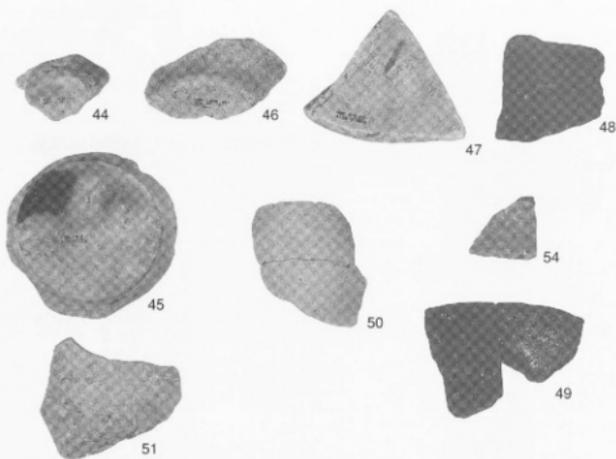
出土遺物 (S-1/3)



写真図版 3



出土遺物 (S=1/3)





63

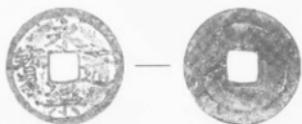


64

出土遺物

(63, 64は S=1/5)

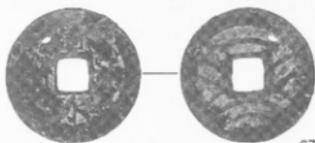
(65~67 S=1/1)



65



66



67

写真図版 6

報告書抄録

ふりがな	ほんみやうたにせきほくつちようさほうこく (くまのりめんろうどうぞうせいこうごにともなうほくつちようさほうこく)							
書名	本田宮田遺跡発掘調査報告 一 熊野農免農道造成工事に伴う発掘調査報告一							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	14							
編著者名	尾野寺克実							
編集機関	大門町教育委員会							
所在地	〒939-0294 富山県射水郡大門町二口1081 TEL.0766-52-6964							
発行年月日	1998年3月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
ほんみやうた 本田宮田	ほんみやうた 本田宮田	163821	382053	36° 42' 49"	137° 04' 12"	19970528 ～ 19971212	2,500	農道造成 工事に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本田宮田	集落	弥生時代 後期 鎌倉時代	溝 土坑 穴	弥生土器 土師質土器 須志器 珠洲焼 木製品				

大門町埋蔵文化財調査報告第14集

本田宮田遺跡発掘調査報告

熊野農免農道造成工事に伴う発掘調査報告

発行日 平成10年3月

発行 大門町教育委員会

編集 大門町教育委員会

印刷 小間印刷株式会社

